

1. 教育の責任

国際日本学部の教育目標である「日本および世界の多様な歴史、言語、文化、文学、国際関係に対し、尊重、理解、受容を試みることで幅広い視野と教養を持つとともに、専攻領域における専門的能力」の育成のため、西洋史を学ぶことを通じて、最終的には、主に以下の能力を修得してもらうことを目指している。

1. 過去の歴史をできる限り同時代の価値観に即して理解することができ、それにより現代の価値観を相対化できる（時間を越えて過去の人々の考え方や感性に寄り添おうとする姿勢）、2. 遠い外国の歴史であっても、自らと無縁のことは思わず、それを日本の歴史と比較して関連づける視点を持ち、それにより自国の文化・価値観を相対化できる（空間を越えて異なる文化を理解し、それを尊重する姿勢）、3. 西洋の歴史を一国単位あるいはヨーロッパ世界の中で完結したものとして理解するのではなく、国際的にあるいはヨーロッパ外の世界との関わりにおいてとらえ、かつ、それにより西洋中心的な視点を相対化できる（グローバルな視点から世界史を見る姿勢）、4. 王侯・貴族・聖職者・市民など様々な歴史主体の利害・立場やそれらが織りなす関係性に着目して西洋史を見ることのできる（複眼的に歴史を見る姿勢）、5. 現代における様々な事物・出来事や現代人の意識・価値観が、多かれ少なかれ歴史の産物であり、過去の歴史とつながっていることを理解できる（物事を歴史的に見る姿勢）

2023年度に担当した授業科目は下記の通りである。

「キャリアデザインⅢ」（演習、コアカリキュラム科目、春学期、2単位、20名）

「キャリアデザインⅣ」（演習、コアカリキュラム科目、秋学期、2単位、19名）

「西洋史の扉」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択必修科目、春学期、2単位、121名）

「西洋史講義」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択科目、春学期、2単位、52名）

「西洋史総合講義」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択必修科目、春学期、2単位、18名）

「西洋史研究 A」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位、34名）

「歴史と史料 A」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位、97名）

「西洋史研究の歩み」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位、44名）

「ゼミナールⅠ」（演習、コアカリキュラム科目、春学期、2単位、14名）

「ゼミナールⅡ」（演習、コアカリキュラム科目、秋学期、2単位、15名）

「卒業研究」（演習、コアカリキュラム科目、通年、4単位、13名）

2. 教育の理念

「グローバル化」という言葉が聞かれるようになって久しいが、今日、世界の出来事が自国の政治・経済や日常生活などに重大な影響を及ぼしうることは明白である。また、日本に居住する外国人の数も年々増加している。このような状況において、国境を越えた国・地域間の協力・連帯や、異なる文化的背景をもつ人間同士の共生は重要な課題であり、本学の建学の目的である「優れた国際感覚及び問題解決能力を備えた人材」が求められていると言える。私の専門とする歴史学は、国際的な諸問題や多文化共生に直接の解決策を与えるものではないが、上記1で述べた5つの能力を修得することは、国際感覚や問題解決能力の育成につながると思う。西洋史を学ぶことを通じて、最終的にはこれらの能力を修得してほしいが、まずは、外国の出来事や文化に関心をもち、「内向き志向」を乗り越える精神を養ってもらいたいと考えている。

また、日本人の平均寿命は男女ともに80歳を超え、人生100年時代の到来が予見されているが、他方で、人生や生活の質が問われるようになっている。本学の建学の精神である「生涯にわたる、人生のための学び」は、ただ生きるのではなく、よく生きるうえで今後、重要性を増していくと思われる。建学の目的である「豊かな教養」や「旺盛な自己開発精神」の育成は、この人生のための学びの基礎となるであろう。上記1で述べた能力の修得は、こうした教養や自己開発精神の育成にも資すると思われるが、さしあたり、西洋史を学ぶことを通じて、批判的な情報の摂取能力や価値判断能力を身に付けてもらいたいと考えている。なぜなら、とりわけインターネットを通じて情報があふれている現代社会において、情報の真偽や物事のよしあしを判断する能力、そのための基盤となる、教養に裏打ちされた知性・道徳・価値観を持つことは、人生をよく生きるうえで非常に重要と思われるからである。複数の史料や研究文献を参照し

て、批判的に歴史像を再構成することや、その過程で過去の人々の思考・判断・行為に触れることは、こうした批判精神や価値判断能力を鍛えることにつながると考える。

3. 教育の方法

上記1と2で述べた目標と関連して、授業では以下のようなことを行った。ここでは4つの授業を例として挙げる。

「西洋史の扉」では、西洋史における重要なテーマをいくつか選んで取り上げ、1つのテーマを2～3回で講義し、西洋史に興味を持ってもらうことを目指した。「西洋史講義」では、古代から近代の入り口までのヨーロッパ史を概説しながら、特定のトピックを挟み込んで深掘りしている。例えば、古代の民主政、中世のフェーデ（私戦）、近世の身分感覚を取り上げ、現代とは異なる、当時の人々の考え方や意識のあり方に注意を促した。産業革命を取り上げた回では、アジアやアメリカとの関係が、イギリスにおける産業革命の展開と深く関わっていることを示した。「西洋史研究 A」では、『砂糖の世界史』を読みながら、イギリスやヨーロッパの歴史が、アメリカ、アフリカ、アジアの歴史とつながっていること、また、近世の出来事が現代の世界のありよう（例えば南北問題）とつながっていることを考えてもらった。「西洋史研究の歩み」では、古代から近代までの歴史家を取り上げ、歴史の見方・解釈の仕方や世界史認識の変遷をたどり、また、今日の歴史学の基礎がどのようにして形成されたかを大まかに示した。

なお、以上の授業においては、授業の内容や課題文献の理解度を図るため、el-Campus で設問課題を出し、回答してもらっている。その際、受講者が理解した内容を、課題の要求にそって自分の言葉で再構成することを特に重視している。これを繰り返すことが、能動的に考え、批判的に情報を摂取し、情報を分析・総合する能力を身に着けるための基礎になると考えるからである。また、文章を書くことを通じて、書き言葉に慣れてもらうことも意図している。このため、提出された課題のいくつかを次の回の授業で取り上げ、フィードバックを行っている。

受講学生には、受講を通じて、まずは、色々な事に関心を持つ、物事を色々な視点から眺める、多様な価値に触れる、情報を主体的・批判的に摂取する（参照した情報をうのみにしない）といった姿勢を身に着けてもらいたいと考えている。

4. 教育の成果

西洋史に関心を持ってもらうという点については、「西洋史の扉」の授業アンケートを見る限り、ある程度、達成されているのではないかと思う。「西洋史講義」については、ヨーロッパ史の概説を伝えるという目的は果たせているように思う。また、授業内容の理解度チェックに関しては、提出された回答から判断して、次第に書き慣れが見られる。この課題の出し方についても、好意的な反応があった（「西洋史の扉」「西洋史講義」授業アンケート自由回答）。「西洋史研究 A」で行った本の内容の要約に関しても、提出された回答から見て、回を重ねるごとに、まとめ方が向上していたように思う。「西洋史研究の歩み」については、提出された課題の回答から判断して、ある程度内容は理解されていると思われ、また、授業アンケートもそれを示唆しているが、回答者数が少ないため、断言はできない。

5. 改善への努力と今後の目標

西洋史に対する関心を高めるという点は、今後も継続していきたい。この点、写真や図版をもう少し活用してほしいという要望があったので、取り入れたい。当面の目標としては、受講者全般の、授業課題に対する回答の質を上げることによって、授業の理解度と論述能力の向上を図ることに注力したい。それと並行して、上記3で述べたような各授業の課題、理解してほしい内容を明確にし、それについて受講者に考えさせ、気づいてもらえるような授業を行っていきたい（この点については、どの程度達成できたか不明確なため）。

【添付資料】

2023年度春学期、「西洋史の扉」、「西洋史講義」授業アンケート

2023年度秋学期、「西洋史研究 A」、「西洋史研究の歩み」授業アンケート